

マルキ・ド・サド自筆書簡について



法学部教授 関谷 一彦

マルキ・ド・サドの名前を聞いてみなさんは何を想像されるだろうか。「サド裁判」、サディズムの語源、牢獄作家、性犯罪、SM、これらは決して間違っていないのだが、サドのごく一面でしかない。最近の学生はSMという言葉は知っていても、残念ながらその語源が18世紀のフランス人作家サドと19世紀のオーストリアの作家ザッヘル=マゾッホに由来することすら知らない。

サドは1740年に貴族の長男としてパリで生まれ、青春時代を軍隊で過ごし、23歳でルネ・ペラジーと結婚。その後数々のスキャンダルを引き起こすが逃げ回り、最終的に1777年から1789年までヴァンセンヌとバステューユの牢獄に収監される。1789年フランス革命が始まる直前にバステューユからシャラントンの精神病院に移されたこの作家は、1790年50歳のときに、およそ12年間の牢獄生活から自由の身となって娑婆に姿を現すことになる。それはまさにフランス革命のおかげであった。混乱した社会に突然現れたサドは、革命に参加し、パリのピット地区委員長にもなるが、彼がどこまで革命に共感して革命運動に参加したのか疑問である。最近のサド研究では、「革命家サド」というイメージには批判的だ。釈放後、サドは自分の芝居や文学作品の売り込みをはかるがなかなかうまくいかない。生活も苦しく、金策に奔走する。自分の持ち物である土地と城を何とかうまく売り飛ばして生活資金を捻出しようと関係先に手紙を書くが、革命のさなかではもともと貴族であったサドは胡散臭い目で見られていた。1797年6月から10月まで、サドはケネ夫人¹を伴ってプロヴァンス地方のかつての彼の領地へ金策の旅に出る。そんなときに書かれたのが、今回関西学院大学図書館が購入したサドの自筆書簡である。

本書簡の見開き左側には、A la citoyenne Ripert à Mazan「マザンのリペール市民へ」と宛名が書かれ、その横にはde Mr de Sade du 6 août 1787「1787年8月6日サドから」と日付と差出人名が書かれているが、この日付は右側の日付とは一致していない。書簡の内容から判断して、1787年というのは書き間違いで1797年が正しいと思われる。というのも、この書簡で問題になっているマザンの不動産について、サドがリペール家に頻繁に手紙を書いたのは1797年8月のことだからだ。また、書簡の宛名は女性であるからリペール夫人

に宛てられたもので、彼女はマザンにおけるサドの財産管理人であるフランソワ・リペール François Ripert の妻である。

見開き右側には、1797年8月6日、カルバントラ Carpentras と日付と発信地が書かれ、ボヌフォワ Bonnefoy と署名された下記の内容の手紙がページ全体に書かれている。測量技師であったボヌフォワは、サドの知り合いで彼に金を貸していた。このボヌフォワがリペール夫人にソマヌに急いで計算書をもって来るように、またマザンの城の建築資材を買いたいと申し出ていた建築家と売却交渉をするように求めたものである。

まずはボヌフォワの手紙からみてみることにしよう。フランス語の改行は書簡の通りに再現した。

Carpentras ce 6 août 1797

Je suis chargé, Madame, par Monsieur De Sade, de vous inviter de faire apporter vos comptes à Saumane sous quinze jours au plus tard, attendu que notre temps est limité de manière à ne pouvoir pas perdre un moment, il vous prie aussi de faire dire à l'architecte qui est disposé à acheter des matériaux du château de Mazan qu'il pourra quand il le jugera à propos, traiter avec Monsieur de Sade, et que nous allons être pendant tout ce mois à Saumane, j'espère Madame que vous voudriez bien ne mettre aucun retard dans ce que Monsieur de Sade vous demande.

Je suis bien sincèrement,
Madame, votre très humble
serviteur.

Bonnefoy

「カルバントラ 1797年8月6日

私は遅くとも2週間以内にあなたにソマヌに計算書をもって来ていただくようにサド氏から言いつかりました。一刻の遅れもわれわれには許されません。サド氏はまた、マザンの城の建築資材を購入したいと言っている

建築家に、購入の判断を下したなら、サド氏と交渉できる旨、また今月中はソマヌに滞在する予定である旨お伝え願いたいと申しております。どうかサド氏の要求を遅れることなく実行していただきますようお願いいたします。敬具
ボヌフォワ]

サド本人の手紙はボヌフォワ署名のページの裏面に書かれたもので、サドが所有するマザンの城の売却と取り壊しについてリペール夫人が妨害をしたとして彼女を激しく非難している。怒り心頭に発したためか、あるいは急いで書いたためか、荒い筆記できわめて読みにくい。

Je viens d'apprendre non sans étonnement Madame que vous avez tenu à l'hôtel de Mazan des propos capable de l'empêcher d'acheter ma maison, que vous avez même porté l'impudence au point de lui tenir d'autres discours faits pour lui faire imaginer que cette maison vous appartenait, que vous avez aussi été prendre chez cet homme copie de la quittance que je lui ai faite de la vente de sa maison.

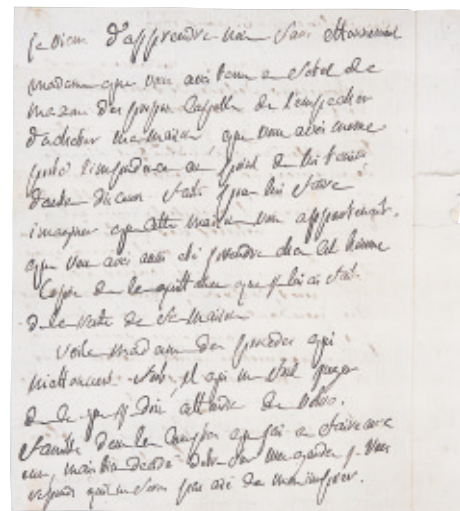
Voilà madame des procédés qui m'étonnent fort, et qui me font juger de ce que je dois attendre de votre famille dans les comptes que j'ai à faire avec elle, mais bien décidé d'être sur mes gardes. Je vous répons qu'il ne sera pas aisé de m'en imposer.

「私はつい先ほど次のようなことを知り、驚きを禁じえません。あなたは私の家を買おうとする人²を妨害するために、マザンの館であらん限りの言葉を費やし、またこの家があなたのものであったと思わせるような言葉を吐くまでにおしつけな言動をなされたそうですね。あなたはまた、彼のところに行って家³の売却について私が作った領収書の写しをとられたそうですね。こうしたやり方は私を大いに驚かせるとともに、あなたのご家族と作る予定の計算書は用心しながら作らねばならないことがよく分かりました。言っておきますが、私を騙すことは容易ではありません。』

ここには署名はないが、サドが書いたものがボヌフォワに手渡され、ボヌフォワからリペール夫人に送られたものであろう。この書簡は蠟で封印されて、ボヌフォワのものと思われる指紋が残されている。この件はこの後どうなったのかと言えば、サドは今度はリペールの息子と何度も手紙でやりとりをし、ソマヌで作られた計算書を調べた後、リペール家とは仲直りをすることになる。18世紀のフランス革命に飲み込まれていったマルキ・ド・サドが、自分の生活資金を得るた

めに金策に走り回る困窮生活の一断面が、この書簡からは読み取れる。

その後サドは、1801年『新ジュスティーン』を出版したマッセ書店が警察の捜査を受けた際に、そこに居合わせ逮捕される。サント・ペラジー（1801年）、ピセートルの牢獄（1803年）からシャラントン精神病院（1803年）へ移され、1814年74歳で死亡した。遺言状には、「墓穴を再び土で覆ったら、その上にドングリをまき、以前のごとく墓穴の場所が雑木に覆われて、自分の墓跡が地面から隠れるようにしてもらいたい。人々の心から私の記憶が完全に消し去られることを私は望んでいる。」と書かれていた。18世紀の混乱の中で、自分の欲望こそが絶対であると主張して、文学的野心に燃えつきたサドのこれがこの世への最期の言葉であった。



関谷 一彦 (せきたに かずひこ)

関西学院大学法学部教授

専門は18世紀フランス文学、とりわけデイドロやサドを研究している。また、エロティシズムという概念に関心を持ち、現在はリペルタン文学やエロティックなフランスの版画や日本の春画も勉強している。共著書に『危機を読む - モンテーニュからバルトまで-』（白水社）、*Lire Sade, L'Harmattan*, 2004、論文には「18世紀フランスのエロティックな版画と日本の春画」、『外国語外国文化研究』XIII、関西学院大学法学部外国語研究室、2004、翻訳にコリンヌ・アマール著、『愛の行為』、彩流社、2004 などがある。

1 本名はマリー=コンスタンス・ルネル Marie-Constance Renelle というが、結婚していたのでケネ夫人 Quesnet と呼ばれている。サドより20歳若く、1790年に知り合ってから、サドが死ぬまで25年間彼の面倒を見続けた。サドは彼女に Sensible 「感受性豊かな女」というあだ名をつけて呼んでいた。
2 上記の建築家であろうと思われる。
3 フランス語では sa maison (彼の家) となっているが、この書簡からはどの家のことか読み取れない。